

学校教育の力を信じたい。 生徒と共に 踏み出す高校改革とは？

豊かで持続可能な学校改革のために、
今私たちは何を大切にすればよいのか。
高校教育改革を中心に、若者のエンパワメントのあり方などについて
実践研究している早稲田大学の菊地栄治教授に伺いました。

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授
菊地栄治

さくち・えいじ ● 東京大学大学院教育学研究科博士課程
単位取得退学。国立教育政策研究所総括研究官を経て、
2005年より早稲田大学教員。専門は教育社会学。不登
校、学級崩壊、高校中退、貧困など教育社会のゆらぎの背
景、特に高校教育改革を中心に若者のエンパワメントのあ
り方について実践的な研究を展開。著書・編著に『進化す
る高校 深化する学び』（学事出版）、『希望をつむぐ高校』
（岩波書店）など。

「あそこは特別だから」から
一歩を踏み出す

特定の高校の改革事例について講演
などでお話しをすると、参加者から
よく「特別な学校のことでしょう」と
いった、少し距離を置くような声を聴
くことがあります。そんなとき私は、
少し残念な気持ちになりながらも、
「特別、丁寧に学校づくりをしてこら
れたことは確かだしなあ」と思ったり
もします。

もちろん、学校改革は教員の心掛
け次第でできるものではありません。
財政的支援やリソースの配分といった
条件整備の現状など、改革への一歩を
踏み出しにくくしている構造に目を
むつては持続可能な取組にはなりませ
ん。改革の基盤には、単なる精神論
ではなく、深い人間観・社会観が支
えとして存在していると思います。そ
うした観点から以下、私が20年以上
かかわりをもたせていただいている高
校を中心に、話を進めさせていただきます。

1996年、国立教育研究所(当時)
に籍を置いていた私は、制度化されて
3年目の総合学科の成果を調べるため、
全国の高校から提供された資料を分
析する作業をしていました。その際、
高校から届く学校案内等の資料の多

くが「総合学科は第三の学科。高校
教育改革のバイオニア」といった文部省
(当時)や設置主体の謳い文句を並べて
いることに気づきました。思いが伝わっ
てこないのです。

国主導の教育改革のため失敗は許
されないという「無謬^{むびょう}性の病」にとり
つかれていたのでしょうか。優秀な、あ
るいは学校に適応しやすい生徒を集め、
一定の成果は出しているようです。け
れど、そうした学校も数年経てば、
中心的な教員が異動し、改革は尻す
ぼみに。新しいタイプの高校が陥りが
ちな畏が繰り返されていると感じま
した。しかし、ある高校から届いた
資料は違っていました。見せかけの成
功にとらわれることなく、自分たちの
言葉で成果が語られていました。若
者を社会に適応させようとするので
はなく、共に社会を構築していく存
在として捉えていること、しかも理想
主義に陥ることなく、現実社会の中
でしっかり学ぶ場をつくっていることな
ど、生徒を主体とした学校改革を進
めている様子が伝わってきました。

その高校は、大阪府立松原高校と
いいます。被差別部落の人々の願いを
軸に「地元高校育成運動」の成果とし
て生まれた学校です。その後、中
生らの署名活動によって知的障がい
ある仲間の受け入れを始めたり、座



未来の社会像から逆算したい。 右往左往させられる時代だからこそ、 生徒の現実から始めたい

学の授業が行き詰まるなか、先生方の手弁当で自由選択講座という参加型の授業を展開したりなど、探究型の学びやインクルーシブ教育、あるいはキャリア教育に、より深い次元で先駆的に取り組んできた、「特別」を地

国が主導する施策だとしても、それを上回るビジョンをもっていれば、クラスに働くこともあります。育てたい生徒像を念頭に、効果的だと思えば力を注げばいいし、そうでないならば代わりに何をすればいいかを教員間で

改めて問う。形式主義の罫に陥り、目的を手段に隷属させないようにしたいものです。

日本の教育改革の特徴のひとつはフォアキャストであると言われます。課題を前に、「あれも必要、これも必要」と足していくことで、現場の先生方は首を絞められてしまいがち。そうではなく重要なのはバックキャスト。つまり、ビジョン(社会像・学校像など)を掲げ、そこから逆算して何が必要かを考えていくこと。現在に右往左往させられるのではなく、社会の未来像を意識しながら、生徒の現実から始めることが必要なのです。

そのためには余計な業務は削り、「これは不要」と跳ね返す。加えるときよりも、何かを削るときこそ当事者の考え方が問われます。

インクルーシブ教育で注目されている大阪市立大空小学校の初代校長、木村泰子先生は、法律や条例に違反しないことであれば、当該校の学びにとつてマイナスになるような行政からの依頼事項は凜として断るそう。校長にはやるべきことの取捨が、かなりの程度可能です。

**生徒のしんどさに向き合い、
教員のしんどさにも向き合う**

松原高校には、「肩幅の狭い」先生



未来のために 「不要なことはいらない」決断を

で行くような高校です。

一方で、先生方ががんばりを頼みとし、実践を普通科の枠組みで維持することに限界を感じていました。その矢先に国が創設したのが総合学科でした。そこで、これまでの取組をベースに「生き方を学び、学び方を学ぶ」というコンセプトを掲げます。後に校長となる易寿也先生は、「国もなかなかいいことを言いよる」と笑いながら話していました。国の政策を批判的に、つまり非難ではなく実践の最前線できちんと吟味する力を発揮していたことを、とても誇らしく思ったことを覚えていきます。



答えは生徒が出してくれる。 学校改革には、社会を変える ポテンシャルがある

を大事にする組織風土がありました。肩幅の狭さとは、介護や子育て、体調など、教員が抱えるしんどさのこと。そのため業務負担を軽減するなどして互いに支え合うのです。生徒のしんどさに向き合う学校はあっても、教員のしんどさに向き合う学校がどれだけあるでしょうか。

加えて、管理職を中心に、「この人は、こういう人だから」といった見切りをつけることをしません。そうではなく、どうすればそれぞれが生き生きできるかを大切にしました。人の可能性を信じているのです。

そうしたなかで大きな役割を果たしていたのが当時の中堅層を中心としたコーディネーター型の教員です。人権教育の担当者が、学年、教科、分掌を越えて、教員間の横のつながりや地域との関係をつくっていました。異動も多いなか、複数担任制と相まって、学校文化を守る役割を果たしていました。

易先生が府立布施北高校に異動し、

デュアルシステムの導入を検討したときは、反対者も含めて準備委員会の委員を募ったことが奏功しました。そこにも懐の深さがありました。実際、「管理職だけでよからぬことを勝手に決めようとしているのでは？」と思いい、プランに反対していた先生も参加したのですが、デュアル実習を通して変わっていく生徒や、応援してくれる地域の人たちの姿を目の当たりにするなかで、「これは生徒のためになる」と理解を示し、その後の学校改革の中心人物の一人となりました。そんな風に生徒を大切にしつつ変われる先生はとても素敵だと思えます。

しかし、現場では今、時間がなさすぎて、皆でじっくり話し合う機会ほとんど削られています。上から下に流れていくライン型の組織においては「もう決まったんだから」となりがちですが、目標を一緒につくったり、「やはり、これは大事だね」とコンセプトを確認したりするプロセスはとても大切です。

生徒の「できなさ」 社会の「いたらなさ」を出発点に

松原高校の最大の特徴は「人間と社会の限界性」を教育の中心に据えているところだと思っています。人間の限界性とは、「できない」こともあるの

が人であるという、ごく普通のこと。気づく人間観のこと。しかし、今の教育は、どれだけ「できる」かを競わせてばかり。グローバル社会への適応や経済的な文脈で語られると、その傾向は一層強くなります。また、社会の限界性とは、社会は必ずしも良いわけではない、過ちもあるという、これまた当たり前の捉え方。だからこそ、より良い社会にするための「異質な他者とのかわりを大切にする主体としての学び」が必要なのです。生産性を高めるために教育があるのでありません。適格者主義に陥ることなく、「できなさ」「わからなさ」を軸に、生徒の現実から出発し、弱さと向き合い、認め合い、他者を通して自分を変えながら、主体となつてより良い社会を構築していく。そうした市民を育てることこそ教育の目的。そこに軸足を置いてこそ、学校改革は持続可能なものになると思います。

松原高校の先生方は一人ひとりの生徒をエンパワーすることも上手です。機械的に何かをさせるのではなく、生徒自身が気づき、生徒同士が互いの関係性のなかで学ぶことを大事にしています。エンパワメントというと、力づける、力を引き出すといったイメージがありますが、弱さも含めて自分や他者を受け容れ、「弱い主体＝人間」

を取り戻すことがその本質だと思えます。関係性のなかで学ぶという点では、主体的・対話的で深い学びも、方向性は同じ。他者の認知過程を外側に出し、それをもとに議論をして、互いに思考を深めていくわけですから。探究学習も絶好の機会になるはず。これまでの高校教育は、進学や就職の準備教育に終始し、出会う大人の幅も狭く、広い視野をもつて学ぶことが後回しにされてきました。それでは主体として社会をより良く変えることはできません。そうではなく、各教科に閉じず、人との対話を通して「なぜこういう状況に置かれているのか」「それを変えるためにはどうすればいいのか」と考え、「こういう世界だったらいいね」と共有しながら、主権者の一人として社会をつくっていく。それが学校教育の最も重要な役割です。

学校を変えるだけでなく 社会も変えられる

最後に、最近の好事例を紹介させていただきます。松原高校では、総合学科の必修科目「産業社会と人間」において、ある年、ブラックバイトや過労死などを取り上げたグループがいました。学習の過程で、「生活保護も甘えた」と批判する自己責任論がネット上にあふれていたことを知り、自分らの置かれ

たしんどい状況も語り合っていた生徒たちはショックを受けます。「では、子どもの貧困も自己責任なのか」という切実な問いをもち、駅周辺でアンケートをとり、役所の担当者にインタビューもしました。そうしたなか、課題解決のためには、信頼できる人に会い、つながる場が必要だと確信。校内に居場所をつくるプランを提案し、年度末の校内発表で最優秀賞をとりました。

話はそれで終わりません。それに応えた教員が、市内で子ども食堂(孤食の解決等のため、無料または安価で食事や団らんを提供する社会活動)を展開するNPOに声をかけたことで交流が始まり、2017年夏には松原高校版子ども食堂がスタートしたのです。子ども食堂は月一回ずつ学校と地域で開催され、学校で行われる「松高キッチン」には、NPOの方々の支援に加え、スクールソーシャルワーカーも参加されます。「みんなの食卓」と銘打った地域での開催日には、現在多くの子ども

もや保護者が集まっています。

生徒の問いから始まった学習が、学校を変えただけでなく、社会も変えていったのです。そのことに私はとても感銘を受けました。しかも、その陰には、「立派な発表だったね」で終わらせず、問題を先送りすることもせず、生徒の疑問や熱意に応えた大人たちがいたわけです。

こんなふうに、大きい視点で教育を捉えれば、まだまだ可能性は広がると確信しています。立派な人間として生きるとはどういうことか。今していることは人類の進歩にどうつながるのか。そうしたことから議論を始めることを忘れないでください。

大人が勝手に想定した「こうあるべき」という狭い枠に生徒を閉じ込めず、「できる・できない」という尺度で測ることなく、数字になることだけで競うことをやめた先に、光は見えてくると私は思います。

大人が想定した枠に生徒をはめない。

社会のいたらなさを生徒と超えるとき

光は見えてくるはず

